

〔浜松市長賞〕

ゴールのないバトンリレー

浜松市立三ヶ日中学校 二年 外山 凌

「いくら話しても、わかってもらえんことは多いですよ。それでもかまわんです。伝えつづけることが大事だと思うから。」

まず、ぼくはこの被爆者の言葉を聞いて、とても寂しい気持ちと、同じ日本人として恥ずかしい気持ちになりました。どうして、分かってもらえないのだろうか。

この本は、「このままでは、原爆のことが忘れられてしまう」と、勇気を振りしぼって話し始めた被爆者の声を、そして原爆の恐ろしさの惨状を、美術を学ぶ高校生たちが絵にして記録する「次世代と描く原爆の絵」プロジェクトについて語られた本です。

今年で、原爆が広島・長崎に投下されてから七十五年、被爆者の平均年齢は八十三歳以上になるうとしています。やがて、被爆者がこの世からいなくなってしまうば、記憶はどんどん失われていってしまうと思います。戦争も原爆も、高校生にはまったく想像ができない状況の中で、絵にすることの難しさと、体験が衝撃すぎて覚えていないこともある被爆者と何度も話し合いました。でも、ぼくはこの一枚の絵を描くことで、「記憶」を「記録」として残していくという、とてもすばらしいプロジェクトだと思いました。今の時代、平和な広島で生きる高校生たちが戦争や原爆をもう一度見つめ直したり、真実を知ったりすることこそが、平和というバトンを手渡そうとしている瞬間だとぼくは思います。そして、この高校生たちがまた次の世代、次の世代へとバトンを

つないでいくことが、絶対に忘れてはいけない日本の歴史を伝えていく、ゴールのない大切なリレーだと思いました。

ぼくがこの本を読んで、印象に残った場面が二つありました。一つ目は、アメリカ人の高校生が平和記念資料館で講話を聞いたあとに言った言葉です。それは、

「ごめんなさい。わたしたちがしたことを許してください。」

ぼくはこの言葉に対して、とても複雑な気持ちになりました。広島に原爆を落としたのはアメリカだけど、日本もたくさんのアメリカ人を殺したことです。原爆はとても恐ろしいものだけど、ここまでアメリカに恐ろしいものを作らせ、それを使わせてしまった「戦争」という国どうしの戦いがなければ、こんな思いをする敵国の高校生もいなかったことも考えさせられました。

二つ目は、

「うちらは、もう原爆を落としたアメリカ人を憎んじゃおらんよ。でも、けっして忘れはせん。」

と、今まで一度も当時のことを話したことのない女性が言った言葉です。

ぼくはなんだかホッとした気持ちと、この人のとても強い気持ちを感じました。原爆のせいで、家族や友人、家や大切なものを全て失ったのに、こんなことが言える日本人がいるということ、ぼくは誇りに思えます。とてもすばらしいと思います。

今年の八月十五日、ぼくは終戦記念日の日に「女性たちの八・一五」というテレビ番組を見ました。何度も何度も涙が出るようになる場面がありました。戦争での犠牲者は約三百十万人。犠牲になったのは、戦場で戦った男性兵士だけではなく、多くの女性も亡くなったそうです。ぼく

と同じ年くらいの子たちが兵器を作ったり、倒れた血まみれの兵士の手当て、そして、焼けただれて亡くなった遺体を運んだり、とてもつらい仕事をさせられていたそうです。もし、自分だったら…と考えると、とても出来ないと思います。でも、あの時代に生きていたら、それを当たり前にやらなくてはいけないことだったんだと思います。何の迷いもなく…。

戦争はこんなにも悲しく歴史に残るもの。こんなに人々が残酷になるものは、もう二度とあってはなりません。戦争で勝利したって少しも良いことはない。人間が人間を殺したことに少しも変わりはないのだから。世界では、今もお、戦争し貧困や差別などで命を落としている人がたくさんいることをよくニュースで見ます。自分の国だけ良くなればいい。そんな自分勝手な思いだけで行動する人たちが多くなっているように思えます。ぼくは、一人一人が思いやりの気持ちを持つ事、命を大切にすることということが自分にも出来そうな身近な事だと思いました。そして、戦争を知らないぼくたちにも出来ることは、まずは耳を傾けるということ。

ぼくも平和へのバトンを受け継ぎ、守り続け、つないでいけるような人になればいいなと心から思いました。

世界中が平和で、世界のみんなが笑顔であふれますように…。

書名 平和のバトン

広島の高校生たちが描いた8月6日の記憶

著者名 弓狩 匡純

発行所 くもん出版